

A 152 給餌方法の違いによる内因性窒素量に及ぼす影響

和洋女短大 ○藤森直江 坂本志保 菊野恵一郎

目的 小動物を用いて栄養試験を行なう際、飼料内容によって喫食率が減少する事がある。この場合、摂取量の多少による実験結果への影響を防ぐ為に、我々は強制給餌法を考え、強制給餌によるラットへの影響及びこの方法が実験に適しているかどうかを見る為に内因性窒素量を測定して、自由給餌の場合との比較検討を行った。

方法 SD種雄ラットの4週令と8週令を購入し、前者は5～6週令時に本実験を2週間行った後2グループ（一方は10～11週令時に、もう一方は12～13週令時に本実験）に分けた。後者についても2グループ（10～11週令時と12～13週令時）に分けた。群分けは大別して自由群と強制群に分け、強制群は給餌量の差から①自由群が摂取したのと同量（通常量に比べ減量）②通常量の2群に分けた。自由群は飼料の性状の違いから①団子状に練ったもの②強制食（流動状態）に分けた。強制給餌方法は、前報（第34回年次大会）と同様に行い、窒素量の測定も同様に各週の最終2日間の排泄物を採取して定量実験を行った。

結果 内因性糞中窒素量は、同一実験期間内の各群間に一部を除いて有意差が認められなかった。内因性尿中窒素量は1・2週の間には有意差が見られたものの、群間には認められなかった。従って、給餌方法・飼料量の違いによる内因性窒素量の差は認められず、ラットへの影響は無いものと思われる。不喫食現象を生ずる様な実験の場合は、強制給餌方法の適用は可能であると考えられる。